

提出日：2014 年 3 月 31 日

保坂健二郎（東京国立近代美術館主任研究員）

イ. 展覧会タイトル

# Of the Old, with the Old, for the Old

## Art After Tatsumi Orimoto

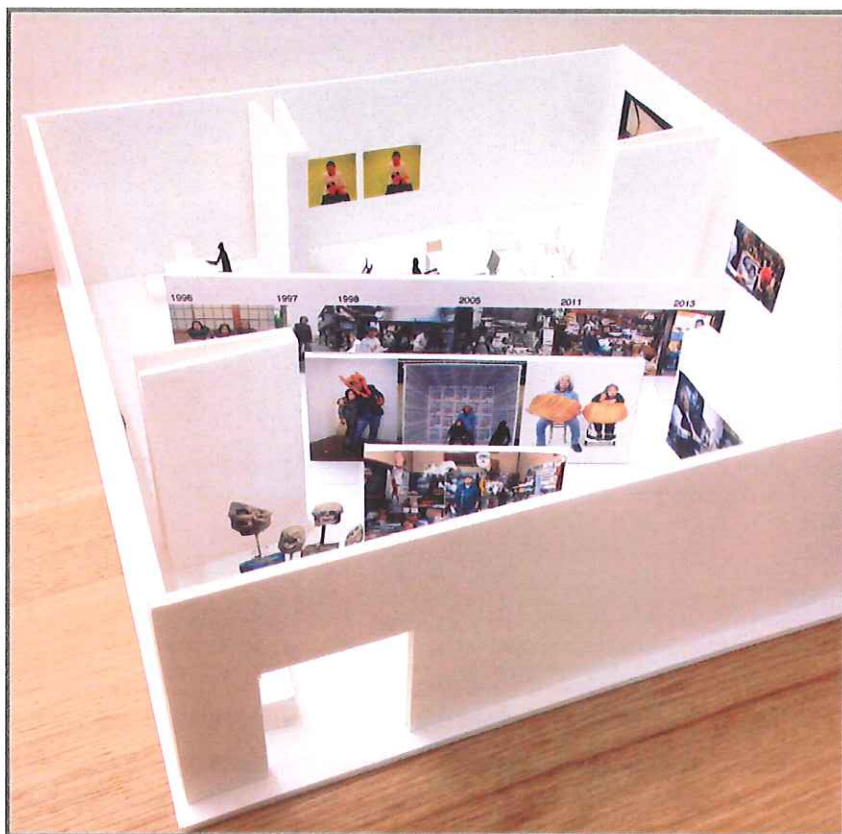
高齢者の、高齢者とともにある、高齢者のための  
折元立身以降のアート（仮）

ロ. 出品作家名

折元立身（1946- Tatsumi Orimoto）

砂連尾理（1965- Osamu Jareo）

野村誠（1968- Makoto Nomura）



## ハ. 展覧会の基本コンセプト

日本の現在を代表するアートとして、私は今回、高齢者と「パフォーマティヴ」に関わっている作品を紹介することを提案したい。それらのパフォーマンス作品は、創造性を介した高齢者とのコミュニケーションが豊かさとなりうることを、説得力をもって示してくれる。のみならず、高齢者の記憶や創造性やふるまいを創作行為に取り込むその手法によって、高齢者の実存をパフォーマティヴに認められることを実証してくれる。そこには、私たちが高齢化社会をサバイブする鍵を見出すことができるだろう。

2013年12月11日、G8の閣僚級が集まる初の「認知症サミット」がロンドンで開催された。国際アルツハイマー病協会の調査によれば、2013年現在、世界全体の認知症患者は約4400万人で、2020年には7000万人、2050年には1億3500万人を超えると予測されている。その中で日本は2012年現在既に462万人を数える。認知症への対応が国際的にも喫緊の課題であるとき、経済的先進国であるだけでなく「課題先進国」(小宮山宏)でもある日本が果たすべき役割は大きい。

現時点では治療不可能とされている認知症だが、進行を遅らせることができたという事例はいくつか報告されており、ニューヨーク近代美術館が開発した Meet Me Project のようにアートが関わっているケースもある。これは認知症の初期の段階で美術館に来てもらうというプログラムで、そこでは、感性と記憶を刺激し、鑑賞体験を言語化し、その「場」を他者と共有することで、認知症やアルツハイマー病の進行を遅らせることが意図されている(介護者同士のコミュニケーションが生まれる点も見逃せない)。この Meet Me に倣ってアイルランドでは既に Azure Project が立ち上がっているし、英国でもテートやV&Aが、認知症患者に対応するファシリテーターの育成に協力している。

日本の美術館界で、こうしたプログラムを定期的に行っている組織はない。しかし、アートが生まれる現場では、あるいは介護の現場では、すでに持続的な活動が生まれている。アートと福祉は人間の自由と尊厳を守るという理念を持つ点で共通する。そんな両者が協働することはいたって自然であることを、アーティストたちは直覚しているのだ。私は、それを紹介する意義が今こそあると考えるし、ヴェネツィア・ビエンナーレという、世界に向けてメッセージを発しうる舞台は、それにふさわしいと考える。

本展で中核となるのは、早くからアートと高齢者の介護を結びつけてきた折元立身である。ハラルド・ゼーマンによって2001年のヴェネツィアの企画展に選ばれていた折元は、その後も認知症の母親を介護するという日常生活の中で作品を生み出し続けている。今日、母親は94歳、折元も66歳であるから「老老介護」の典型的なケースであるが、それでも創作を続けられているのは、アートのパフォーマティヴな力を信じていればこそだろう。またそうした行為が、川崎というローカルな場所に普遍性を与えうるという可能性を感じているからでもあろう。本展では、そうした折元の後に関わった他の事例を、ダンス(砂連尾理)と音楽(野村誠)の中からも紹介する。これは、様々なジャンルに分化してしまったアートの再統合を目指したいというだけではない。映像人類学の存在が象徴するように、art based research と research based art の境界線が失われつつある今、他者と交流し、解釈し、表現しようとする行為においては、ヒエラルキーは存在しないということを確認したいためでもある。それゆえ本展では関連資料を見られる小さなラウンジも一部に設置し、展覧会を中間的な生成物とすることをめざす。

## 二. プラン詳細・出品作家の選定理由

### 二-1-1. ギャラリーの基本構成（以下、添付資料の図版を参照のこと）

写真多数、ドローイング多数、映像（プロジェクタ：3台、70インチ相当の大きなモニタ：3台）、オブジェ複数点（1点は小さな液晶複数台を含む）を展示する。

正方形のプランを持つ日本館を、長さ約12mの壁で斜めに切り、入口側＝手前側を「家族とのコミュニケーション」、奥側を「他者とのコミュニケーション」とゾーン化する。その上で、手前側では折元ひとり、奥側では折元、砂連尾、野村の三人を展示する。これにより、折元の「登場」と、それ以降のアートの在り方とが、明確に分かれることになる。野村も砂連尾も、①国内のみならず海外においても（家族以外の）高齢者や障害者との共同制作を行ってきていること、②そうした共同制作を継続的に行っていること、③高齢者や障害者との協働制作以外での創作活動でも高い評価を得ていることなどから、高齢者とパフォーマティヴに関わるアートの重要性を、国の内外に関係なく確認し、その重要性を問おうとする本展にふさわしい。

また手前のゾーンはさらに2本の長さの異なる壁で区劃する。壁高を2.5mとすることで、物理的な圧迫感は軽減しつつ、むしろトップライト＝自然光の効果が強調される。また、折元の作品そのものの「密度」が体感できるようになる。

### 二-1-2. 折元立身

「手前」側には、母親である折元男代（おりもと・おだい）を被写体とした作品、「Art Mama」シリーズを展示する。コンストラクティッド・フォトから始まり、より日常性の高い写真へと進むようにする。それと並行して、近作の「音楽シリーズ」、すなわち、《ベートーヴェン-ママ》（2012）や《エルヴィス・プレスリーのおむつかえ》（2013）などの映像作品も展示する。虐待ではないかという指摘も予測される作品であるが、介護の現場では介護者のモチベーションの維持が課題になっていることを考えれば、展示する価値はあるだろう。少なくとも前者はすでに森美術館で公開されている。

折元は、本展のための新作として、《車イスのストレス》（2012）の2014年バージョンを提案している。介護の象徴とも言える車イスにパンを載せ、そのまま橋桁に突っ込む本作は、荒唐無稽さと暴力性とが共存している点で、また介護の裏側＝現実にある情動を明るみに出しているという点で、折元らしい作品である。2014年バージョンでは、彼の代表的シリーズである「Punishment」と同じく、複数の人物が、同時に、あるいは漸次的に、車イスを壁などに衝突させるパフォーマンスを行う予定である。

また「奥側」の空間＝「他者とのコミュニケーション」の空間では、折元が、国内外の福祉施設や病院で行ったパフォーマンスおよび大勢の「grandmother」を一堂に集めて食事をふるまうパフォーマンスの記録を展示する。とりわけ後者は、2014年4月初旬にポルトガルで500人を集めるパフォーマンスが実現する予定である。これはBBCでの放映を前提に撮影されていることから、同素材を使用した紹介も検討する。

### 二-1-3. 野村誠

野村は現代における音楽の可能性を追求するべく、彼が「しょうぎ作曲」と呼ぶところの共同作曲を実践してきたことで知られている。1999年からは、膨大な記憶を持ち

つつ飛躍的な想像力を持つ高齢者の創造性に魅了されて、横浜の介護老人福祉施設「さくら苑」に通うようになる。その成果は既に「復興ダンゴ 老人ホーム REMIX」として発表されており、本展ではそれを展覧会ヴァージョンへと編集し紹介したい。

なお、野村は、彼が既にあたためている新提案の中から、本企画のためにふたつを提案してくれている。ひとつは、さくら苑の人たちとの共同作曲による「合唱」である。楽器の演奏よりもずっと身体的な発声をメインに据えることで、高齢者の創造性の特性が明らかになるであろう。もうひとつは、すでにこれまでワークショップを行ってきたことのあるイタリアやイギリスの高齢者との共同作曲である。いずれも高齢者という相手のあることなので絶対可能なプランとは言えないが、ドキュメントベースの編集となっても、十分に紹介する意義のあるものとなるだろう。

#### ニ-1-4. 砂連尾理

コンテンポラリーダンスから出発した砂連尾は、現在、高齢者や知的障害者などとのコラボレーションも積極的に行っている。2009年からは、西川勝・大阪大学特任教授とともに特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」にて、ダンスのワークショップを行っており、すでにその成果は、二回ほど発表されている。今回は、展覧会用にその記録を編集する。また、可能な限りにおいて（彼らが行っている助成金の結果次第において）、ドイツやメキシコなどの外国で実施する高齢者向けのダンスワークショップのドキュメントも、問題の共通性・普遍性を確認するためにも紹介したい。

#### ニ-1-5. Interweaving Lounge

会場の動線上の最後＝空間的には途中にラウンジを設置し、タブレットなどで以下の資料をオンデマンド形式で紹介、日本館の展覧会を締めくくると同時に外部へとつなぐ。

- ・3人のアーティストそれぞれに対するインタビュー映像
- ・3人のアーティストに関わっている福祉施設のスタッフへのインタビュー映像
- ・パフォーマティヴ社会学の確立をめざす岡原正幸（慶應義塾大学教授）や、International Research Centre "Interweaving Performance Cultures" のディレクターでありベルリン自由大学の演劇研究の教授である Erika Fischer-Lichte などの研究者に、今日の社会における「パフォーマティヴ」について問う。またアメリカで『Positive Aging Newsletter』を刊行している Kenneth Gergen & Mary Gergen には「エイジング」について問う。
- ・関連領域における事例の紹介。パフォーマティヴィティを重視するコンセプトから今回は捨象せざるをえなかったが、藤本壮介の《登別のグループホーム》（2006年）や、石上純也の秋田のグループホーム（計画中止）や、大阪市立大学生活科学学部の研究活動など、とりわけ建築における実践を紹介する。

#### ニ-2. ピロティ

ピロティ部分では、Art Mama 以外の折元のパフォーマンス作品を写真を通して紹介したい。具体的には「パン人間」と「Punishment」のシリーズが中心となるだろう。これらは、ギャラリーで展示中の折元作品を解釈する文脈として機能するはずである。また同時に、2009年のパリ・フォトで「a special jury distinction」を受賞している折元の写真は、日本館の前の道を行く人々の興味を引くに違いない。

## ホ. 企画の背景について

ここ数回のヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展は、国別パヴィリオンを持つという特性もあって、見本市の様相を呈していた感がある。しかし前回の企画展である「百科事典的宮殿」は、プロとアマの境界を越えて展示することで、ヴェネツィアに代表される国際展が今後進むべき方向のひとつを指し示していたと言えるだろう。今回のディレクターとなったオクウィ・エンヴェゾーが 2007 年に光州ビエンナーレで行った「Annual Report: A year in Exhibitions」も、直近に世界各地で行われていた優れた展覧会をアーカイブ的に再構成するというもので、これまた他の国際展と一線を画していた。

このような事実に鑑みても、国際展やアートに求められる内容は、明らかに変わりつつある。当然、アーティストの存在意義も変わりつつある。彼ら／彼女たちの多くは、今や、創作行為の重点を、「作品＝売買を成立させるモノ」から「プログラム＝協力の依頼が可能なコンセプト」へと移している。アートにおける重要なサポーターも、美術館やコレクターだけでなく、自治体、教会、病院、福祉施設、NPOなど多様化している。そうした変化を促した早い事例が川俣正だったのは言うまでもないが、今回の出品作家の砂連尾や野村にしても、作品本位主義（彼らの場合は、劇場における作品発表のみを評価する立場）に立ち続けてしまうと、この重要な変化を見誤ることになる。

前回の日本館＝田中功起の個展が特別表彰を受賞したのもその変化と無縁ではないはずだ。その意味で日本館は、すでに方向転換の先鞭をつけたとも言えるのだから、今回の企画は、変化を持続し展開させるような内容が望ましいと考える。私が、数多ある可能性の中から本企画に決定した理由のひとつは、ここにある。

なお 2015 年は、アロイス・アルツハイマー (Alois Alzheimer, 1864-1915) の没後 100 年であり、2 月にはアメリカで 2 回目の「G8 認知症サミット」が開催予定である。

### へ: 予算概要 (単位: 万円、上限 4,000 万)

作品制作費 (機材費、協力謝金等)	500
関係者旅費	400
作品輸送費 (保険込)	600
会場施工費 (電気関係含む)	600
現地管理運営費 (コーディネーター謝金、会場運営費)	1000
カタログ作成費 (印刷、原稿料、翻訳)	400
広報費	180
通信費	20
その他諸謝金	100
予備費	200
合計	4000

## ト. 出品作家および提案者の略歴（生年順）

折元立身（おりもと・たつみ） 1946年生まれ 川崎市在住

### 略歴

- 1969 渡米、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アートに学ぶ
- 1971 ニューヨークへ移住、アート・スチューデント・リーグに学ぶ
- 1977 帰国

### 主な個展（2000年以降、パフォーマンスを含む）

- 2000 ブラウンシュバイク写真美術館
- 2000 原美術館
- 2001 CCGA 現代グラフィックセンター（福島）
- 2005 Posco Art Museum、韓国
- 2005 川崎市民ミュージアム
- 2003, 2004, 2006 DNA ニューアクションギャラリー、ベルリン
- 2008 サンパウロ美術館
- 2010 A Foundation（リバプール）
- 2013-2014 モスマン美術館（NSW州、オーストラリア）
- 2014 「500人のおばあちゃん」アレンテージョ・トリエンナーレ

### 主なグループ展（国際展を中心に）

- 2001 ヴェネチア・ビエンナーレ
- 2001 横浜トリエンナーレ
- 2002 オープニング展覧会（バルティックセンター現代美術館、イギリス）
- 2002 サンパウロ・ビエンナーレ
- 2002 釜山ビエンナーレ
- 2003 シャルージャ・ビエンナーレ
- 2006 ブカレスト・ビエンナーレ
- 2013 「LOVE展」 森美術館

砂連尾理（じゃれお・おさむ） 1965年生まれ 大阪府在住

1991年、寺田みさことダンスユニットを結成

1993-1994 ホセ・リモン・テクニクを Alan Danielson に師事。

2002 「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞（グランプリ）」「オーディエンス賞」を受賞

2004 京都市芸術文化特別奨励者

2008年文化庁・新進芸術家海外留学制度の研修員として、一年間ベルリンに滞在

近年の主な活動

- ・「劇団ティクバ+循環プロジェクト」（Theater Thikwa との日独共同制作）
- ・東日本大震災における避難所生活者の声を集めアーカイブ化するプロジェクト（映像作家・細谷修平との協働）
- ・「からだできく、からだではなす」、せんだいメディアテーク、2012年
- ・「猿とモルターレ」北九州芸術劇場、2013年
- ・平野智之の作品をスコアにしたソロ作品、横浜市民ギャラリーあざみ野、みずのき美術館、2013年
- ・「えずこ REMIX」、えずこホール（仙南芸術文化センター、宮城県）、2014年
- ・「家から生まれたダンス」、伊丹アイホール、2014年
- ・「復興ダンゴ」（野村誠との協働）、伊丹アイホール、世田谷美術館他、2014年
- ・「とつとつダンス」舞鶴赤れんがパーク、2010年、2014年

野村誠（のむら・まこと） 1968年生まれ 京都市在住

略歴・演奏歴・展覧会歴

1992 京都大学理学部数学科卒業。ピアノを遠藤誠津子に師事。作曲は独学

1991 ソニー・ミュージック・エンタテインメントのオーディションでグランプリを受賞

1994 プリティッシュ・カウンシルの助成金を得て英国へ。ヨーク大学を拠点に活動

1995 帰国

1996 JCC ART AWARDS の現代音楽部門最優秀賞を受賞

1997 国立武蔵野学院で音楽を指導

1999 横浜のさくら苑にてお年寄りとの共同作曲をはじめる。現在に至る

2001 「出会い」展（東京オペラシティ・アートギャラリー）に出品（島袋道浩と共同）

2003 第1回アサヒビール芸術賞受賞

2005 横浜トリエンナーレ

2006 NHK 教育テレビ「あいのて」音楽・音響監修

（中略）

2009 ロンドンの Spitalfields Summer Festival に出演。ハダスフィールドの小学校で詩人の Peter Spafford、音楽家の Hugh Nankivell とワークショップ

2010 BankART にて「老人ホーム・REMIX#1」を初演

2010 ダンス、演劇、音楽、マネジメントの4つのワークショップから、「福岡市博物館 REMIX」を作

曲、初演。ダンスのための21の小品「福岡市美術館 REMIX」を初演。プリマス・バービカンシアターにて公演。ニューカッスルの Baltic で幼児とのワークショップ。The Sage Gateshead で高齢者とワークショップ。福岡アジア美術トリエンナーレ。クレムス現代音楽祭にてパフォーマンス。イタリアのトレヴィソにてコンサートおよび野外即興セッション。

2010 あいちトリエンナーレ 2010

2010 「ホエールトーン・オペラ」をイギリスの Dartington で全幕上演

2011 インドネシアで共同作曲。その後、同国の各地のフェスティバル等に参加。

2012 ドキュメンタリー・オペラ「復興ダンゴ 老人ホーム REMIX #2」を ST スポットで発表。「千住だじゃれ音楽祭」。日本財団アジア・フェローシップにより東南アジアでのプロジェクトを開始。国際芸術センター青森にてアーティスト・イン・レジデンス。ロンドン、ヘイワード・ギャラリーで3日間のワークショップ。

2013 アートスペース虹（京都）で個展

## 保坂健二郎（ほさか・けんじろう） 1976 年生まれ 東京在住

### 略歴

2000 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了（美学美術史学）

2000 東京国立近代美術館に勤務、現在に至る。

### 主な展覧会（特筆ないものは東京国立近代美術館）

2008 「エモーショナル・ドローイング」

「建築がうまれるとき ペーター・メルクリと青木淳」

2009 「この世界とのつながりかた」 ボーダレス・アートミュージアム NO-MA（近江八幡）

「Emotional Drawing」 SOMA 美術館（ソウル）

2010 「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」

2011 「イケムラレイコ うつりゆくもの」

「Double Vision: Contemporary Art from Japan」モスクワ近代美術館、ハイファ美術館

2012 「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう」ギャラリーαM（東京）

「日本のアール・ブリュットについて語ろう 私たちが考えるこれからの美術」みずのき美術館

2013 「フランシス・ベーコン展」 \*本展により西洋美術振興財団賞学術賞を受賞

2014 「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展 ヤゲオ財団コレクションより」

「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」 (Haus Konstruktiv, Zurich)



会場構成案

